



2017.
10.21.
SAT.

轟 熱 凍
(とどろき
しょうと)



ENCOLLAGE
Encollage

尅尅 本編へGO♪ 尅尅

毎年、何度か、

ぼくはこの地にやってくる。

母親の故郷である。

そこには今は亡き、

おじいさん、おばあさん、

そして、父親のお墓がある。

つまり、

お墓参りの為に、

年に数度、この地にやって来る

のである。

そこはどんな場所かと言うと、

山々に囲まれた盆地で、

あらゆる所に森がある。

目を瞑ると思い出す...

夏の思い出。(10才の頃)

妹「お兄ちゃん、

ビックリマンチョコを

買いに行こうよ(´ω´)」

妹がねだるお菓子を

買いに行くためには、

小さな森の小道を通り抜ける

必要がある。

そこは木々に囲まれた
森のトンネルをくぐりぬけるのだが、

ある噂話がある。

母「あそこの森は、
タヌキが出て、人を化かす噂話が
あるから気を付けてね！」

ぼくは何をどう気を付けたら良いか
想像もつかなかったが、
その頃はわんぱく坊主(本当に坊主頭)
だったので、冒険の予感にワクワクが
止まらなかった。(o^^o)v

父「今から、

空き家になっていた(母の)家の

大掃除をするから、しばらく、

これを持って遊んできなさい。」

ぼくは、その当時はまだあった

五百円のお札を一枚、父から

受け取った。

ぼく『父さん、ありがとう。』

今からニコル(妹&仮称)と森を越えた

先にある駄菓子屋さんに行ってくるよ！

۹('ω')و』

父「タヌキに化かされないように、

気を付けるんだよ！」

ぼくとニコルは、

曲がりくねった小川沿いの道を

走って行った。

走りながら、

竹林が生い茂る隣の森を見ると、

白い着物を着た女性が赤ん坊を

抱いているのが見えた。

(^_^)汗

タヌキではなく...

幽霊が出るんでは...??

とチョット思った。

今思い出すと、

その森は、ジブリ映画のトトロが

住む森にソックリだった。

ニコル「お兄ちゃん、

走るの速いよ！

ニコル、ついて行けないよ！

チョット待ってよ。(。 -▽-)b」

ぼく「ニコル、ストップ！

そこにある木の棒切れを持って！」

目の前に、

少し小さめのイノシシが

立ち塞がり、こちらを睨めつけていた。

ニコル「え？え？

リアルに私たち、ドラクエしてるん

ですけど！(*∇*)マジ？」

ぶつぶつと文句を言いながらも

棒切れを手に持ち、それで、

イノシシを叩いた。

ニコル「エイ！」

ポコッと軽い音がした。

イノシシにはノーダメージのように

見受けられた。(。 -∇-)v

っていうか、やば怒るよねえ(汗)。

イノシシは鼻息を鳴らしながら、

めっちゃ怒っている。

ぼくはニコルに指示を出した。

ぼく「その木に登れ！早く！」

枝分かれした幹がしっかりしている

その木はぼくたち人間には登り易いが

イノシシにとっては、その登るという

動作はハードルが高いようだった。

イノシシの得意の攻撃技

【突進】をかろうじてかわした。

(* - *)♪

ぼくはニコルと一緒に、
その木に登り、我ながら良い采配
だったな！と少しドヤ顔になっていた。

しかし、作戦は失敗であった。

怒り狂ったイノシシは、
いつまでも、その木の下から離れず、
それどころか、彼(イノシシ)の仲間たち
がたくさん集まって来ていた。

5匹も居るよ。

お兄ちゃん、どうするの？」

ぼく「(̄▽̄)汗」

ニコル「ニコル、

お腹空いちゃった。

もう帰ろうよ！」

ぼく「ニコル、

なんかさあ...ファンタジー風の映画なら、

魔法を使えたり、特殊能力があるじゃん！

ニコルには何かないのかい？」

【チョット待って！】とばかりに...

ニコルは肩から背負っていた

ポシェットに手を突っ込み、

ガサガサと何かを探し、

その後、満面の笑みを浮かべて、

それを取り出した。٩('ω')و

ぼく「(¯▽¯)汗」

ドングリ10個！

ぼくは妹のことを

【森のフェアリー(妖精)か！】

と思わずにはいられなかった。

※ なんて可愛いボケなんだ♪(ハート)

ぼく『ドングリ、使えないよねえ。』

ニコル『だよね～。 (。 -∀-)b』

ポシェットの中には、

その他に、防災ブザーが入っていた。

ブザーにはボタンがあり、

それを思わず押してしまったニコル。

ビー——！

ビー——！

ビー——！

物凄い爆音が森中に鳴り響いた。

その音にびっくりしたイノシシ2匹は

逃げていったが、まだ3匹は

相変わらず子供たちに睨みを

効かせていた！

それから1時間が経ち、

日は暮れはじめていた....。

ニコル「お兄ちゃん、

疲れた～。帰りたい～。

|(3)| ブーブー。」

ぼく「ゴメンなあ。

ぼくには何もできないや。」

その時、森の方を見ると、
あの着物を着た幽霊が近づいて
きていた。

木の下にはイノシシ。

ぼくは子供ながらに、
絶体絶命にあることを理解していた。
せめて、妹のニコルだけは助けたい！

そう思いながら、
イノシシと戦うために、
木の下に降りようとした。

すると、

ポケットから落ちたドングリが

コロコロとイノシシの鼻先に

転がった。

イノシシ達はパクパクと

そのドングリを食べると

満足して、森の中に去って行った。

٩('ω')

チャチャチャ、チャー、

チャーチャ、チャッチャッチャー♪

(ファイナルファンタジーの

バトル終了の曲が頭の中で鳴り響いた)

二人は木から降りて、

(駄菓子屋に寄ることをやめて)

家路に向かった。

すっかり暗くなった森の方から

人影が...

身構える10才のぼくと、

8才の妹。(°▽°)汗

現れたのは父さんだった！

妹は涙で目を腫らしながら、

父親の胸に飛び込んだ。

ぼくは、

父さんに親指を立て、

【妹をちゃんと守ったぜ！】と

目で伝えた。(-∀-)v

帰り道、

妹はすっかり父さんの背中の上で

眠っていた。(-_-)zzz

ぼく「父さん、

一つ聞いてもイイ？」

父「コウ、どうした?!」

ぼく「ぼくさあ...

あの竹林の中で、女の人の幽霊を

見たんだ。

アレって、

何だったんだろうなって??

♪(´ε`)」

父「お宮さんのことかあ...。

彼女は白い着物を着ているから、

幽霊みたいに見えるけど、

ちゃんと生きている人だよ。

父さんに電話で知らせてくれたのも

彼女だったんだよ。

ニコルの防犯ブザーの音で

お前達のSOSをキャッチした

みたいだよ。」

ぼく「そうなんだ。

何か、いろいろ謎が解けて

スッキリしたよ！

この世の中、幽霊とか、

UFOとか、そんな超常現象なんて、

ないんだね！ |(3) |」

父「お前は物知りだなあ。

どこでそんな難しい言葉を

覚えたんだ。

ホント、びっくりするよ。

さあ...着いたぞ。

母さん、お前達のことを

心配していたから、今日あったことを

ちゃんと話すんだぞ！」

ニコルは相変わらず眠り姫に
なっていたから、兄貴のぼくが
責任を持って説明しなくちゃな。

と自覚したのであった。

母さんの作っている
今夜の晩ご飯【カレーライス】の
イイ匂いが漂っていた。

『ただいま～♪』

『お帰り～♪』

そんな何気ない日常。
そんな言葉の掛け合いは、
何ものにも変えがたい...

平和な世界だったなあ。

とぼくは思った。

♪(´▽`)

(おわり)

ニコルと森のファンタジー

<http://p.booklog.jp/book/118064>

著者：森亜美(@VenetyAmi)

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/dreamsami/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/118064>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト